

# 疑問詞の結び

小田 勝

## On the Form Required by *Wh*-interrogatives in Classical Japanese

ODA, Masaru

### Abstract

This paper discusses which inflectional ending appears when *wh*-interrogatives include no *kakari*-particle in Classical Japanese. The conclusions drawn from this study are as follows:

1. In the Nara period, the dictionary form was unexceptionally used and such usage was succeeded by Heian-Waka.
2. In the Heian period, the adnominal form became to be linked to *nado* by analogy with its linkage to *nazo* and *ya/ka*.
3. In the prose works of the Heian period, the adnominal form, instead of the dictionary form, was generally used with *wh*-interrogatives.

### キーワード (Key words)

疑問詞 疑問詞疑問文 結び 何の結び 萩原広道

### ○ 本稿の目的

次例 (1) ～ (4) は、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文であるが、(1) (2) の文末は連体形に、(3) (4) の文末は終止形になっている。

(1) 「いづこより入り来つる」と問ふなりつるは (紫式部日記・二九四)

(2) 「いづちおはしまさむずる」と問へば (今昔・23-19・新大系)

(3) 年の内出で来る節会の中に、いづれ、いと切に労あり。定め申されよや。(うつほ・内侍のかみ・四二三)

(4) 起きてゆく空も知られぬ明けぐれにいづくの露のかかる袖なり (源氏・若菜下・④二二八)

この、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文の文末に、連体形、終止形両形が存する現象は、どのように考えたらよいのだろうか。

周知のように、本居宣長は『詞の玉緒』(一七七九年刊)において、

中行の段々は [ぞ] [の] [や] [何] の結び辞也。… (中略) … 中行は皆。つねにはつゞく辞なるを。上に [ぞ] [の] [や] [何]

のてにをはある時は。その結びとなりて。切る、也。『詞の玉緒』 卷一、筑摩版全集一九二二〇頁)

とて、何 (＝疑問詞) の結びを中行 (＝連体形) と考えた。これに対して、萩原広道は『てにをは係辞弁』(一八四九年刊)において、

拾 石見がた [なに] かはつらき 一つらからは恨みがてらにきてもみよかし

後 浅茅生の小野のしの原しのぶれどあまりて [など] か人の恋しき  
古 花よりも人こそあだになりにけり [いづれ] をさきに恋んとか見

同 なに 人かきてぬぎかけし | 藤ばかまくる秋ごとに野べをには  
はす

(以下十五例略)

右の哥ども・印つけたるかもじより。強く激りたる語脈係りゆき  
たれば。何等の結びにはあらず。かの結びなること。よくく味は  
ひ分つべし。(勉強社文庫、十ウ〜十一ウ)

のように述べて、宣長のいう「何」の結びの連体形は、「何」によるも  
のではなく、「何」に伴う助詞「か」によるものと指摘し、「か」を伴  
わない(1)(2)のような例は、(5)(6)のように、文末に語が省  
略されている「略語の格」と考えた。

(5) ひとりしてもを思へば秋の田の稲葉のそよといふ人のなき

コトヨ

(6) 瀧つ瀬のなかにも淀はありてふをなどわが恋の淵瀬ともなき

コトゾ

この広道の考えは、疑問詞疑問文において係りの助詞「か」の存在を発  
見した点でたいへん重要であるが、(1)(2)(6)のような連体形を、  
(5)のような、いわゆる「連体止め」(山田孝雄の「擬換体法」と同  
一視している点で問題である。私見では、中古散文における、疑問の係  
助詞を伴わない疑問詞疑問文は連体形で結ぶのを常態としており、(1)  
(2)(6)のような例は、特別な処理を要する特殊な例ではない。

(1)〜(4)にみるような、疑問の係助詞を伴わない疑問詞の結び  
について、山田孝雄(一九〇八)は、疑問詞が疑問の場合には文末が連  
体形、不定語の場合には終止形で結ぶとし、小杉商一(一九八六)もこ  
れに賛成しているが、此島正年(一九七二)、徳原茂美(一九九一)の

反論の通り、例えば(3)(4)は疑問であって、不定語として「どち  
らかが」「どこかの」の意ではない。また、船城俊太郎(一九七三)は、  
疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文が終止形で結ぶのは、和歌にのみ  
みられる特異な用法であるとする。船城の主張は結論として正しいと思  
うが、(3)のような散文中の用例の指摘や、上代語についての記述が  
ない。

一体、この現象については、本居宣長、萩原広道以来関心がもたれ、  
多くの論文が出されているが、この現象の全体像について、精確な実態  
の記述は行われていないようである。そこで、本稿は、上代歌謡・和歌、  
中古和歌、中古散文と、時代・文体を区別し、係助詞を伴わない疑問詞  
疑問文の結びが終止形、連体形のどちらで現れるか、全例調査を試みる。  
本稿で対象とする用例は、次の基準のすべてを満たすものとする。

一、係助詞を伴わない疑問詞疑問文であること。

二、疑問詞疑問文であれば、問い・疑い・反語の別を問わな  
い。

三、疑問詞が不定を表わして、疑問文とはいえない例は除  
く。

四、「空言をいかなりと言ひて」(万葉集・二四六六)のよう  
な、述語が疑問詞の場合も対象とする(この例では疑問詞  
の結びが終止形の例とする)。

五、結びが、終止形・連体形異形の語であること。

六、結びが、終助詞を伴わないこと。

七、引き歌の一部分ではないこと。

また、本稿で扱う疑問詞は、次の通りである。

疑問代名詞 たれ(who)、何(what)、つれ(which)

疑問副詞 いつ (when)・いつく・いつこ・いつち (where)・など・  
 などで (why)・いかなり・いかに (how)・いくー・いかばかり (how  
 +形容詞)

一 上代歌謡・和歌の場合

上代歌謡 (古事記歌謡・日本書紀歌謡・風土記歌謡) および『万葉集』  
 における該当例は次のようである。<sup>(9)</sup>

連体形							
終止形	2					1	1
		誰	何	いづれ	いつ	いつく	など
							いかなり
							いくー

例をあげる (用例は、いずれも『万葉集』のものである。<sup>(10)</sup> なお、(10) は確例ではない)。

(7) 足日女神の尊の魚釣らすとみ立たしせりし石を誰見き<sup>(11)</sup>「伊志遠  
 多礼美吉」(八六九)

(8) 誰聞きつ<sup>(12)</sup>「誰聞都」こゆ鳴き渡る雁がねのつま呼ぶ声のともし  
 くもあるを (一五六二)

(9) ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と「伊久欲布等」数みつつ妹は我  
 待つらむそ (四〇七二)

(10) 浅茅原小野に標結び空言をいかなりと言ひて「何在云」君をし  
 待たむ (二四六六)

係助詞を伴わない疑問詞疑問文 (で、文末に終止形・連体形同形の推量  
 の助動詞「む」「らむ」「けむ」等を伴わない例) は、そもそも用例数が  
 極端に少なく、上代歌謡・和歌からは、用例が右の四例しか得られない。<sup>(11)</sup>

しかし、(7)・(10) の結びの終止形は、例えば語内に係助詞「ぞ」  
 を含む「なぞ」の結びがすべて連体形であるのと比べても、明らかに規  
 則的である (なお (12)・(13) は確例ではない)。

(11) 一日には千重波敷きに思へどもなぞその玉の手に巻き難き<sup>(12)</sup>「巻  
 難寸」(四〇九)

(12) 一昨年の先つ年より今年まで恋ふれどなぞも妹に逢ひ難き<sup>(13)</sup>「相  
 難」(七八三)

(13) 解き衣の思ひ乱れて恋ふれどもなぞ汝が故と問ふ人もなき<sup>(14)</sup>「問  
 人毛無」(二六二〇)

(14) いでなぞ我がここだく恋ふる<sup>(15)</sup>「幾許戀流」我妹子が逢はじと言  
 へることもあらなくに (二八八九)

ここに、次のことが確認される。

I 上代歌謡・和歌では、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文は、  
 すべて終止形で結び、例外がない。

二 中古和歌の場合

中古和歌 (八代集、私家集、中古散文資料中の和歌)<sup>(12)</sup> における該当例  
 は次のようである。<sup>(13)</sup>

連体形							
終止形	1	8	14	2	2		10
		誰	何	いづれ	いつ	いつく	など
							いかなり
							いくー

例をあげる。<sup>(14)</sup>

【誰】

- (15) よそののみ雲居の月にさそはれて待つといはぬが来たる誰なり  
 (和泉式部続集・九三二)

【何】

- (16) 月日をも数へけるかな君恋ふる数をも知らぬ我が身何なり (後撰・五四三)

- (17) 恋しきも思ひこめつつある物を人に知らるる涙何なり (後撰・七二二)

- (18) 思ひ出でておとづれしける山彦の答へにこりぬ心何なり (後撰・八七六)

「何なり」は(16) (18)のほか、五例。

- (19) ●恋しきはつらさにかへてやみにしを何の名残にかくは悲しき  
 (金葉・三奏本・四五四)

【いづれ】

- (20) 君恋ふと涙に濡るる我が袖と秋の紅葉といづれまされり (後撰・四二七)

- (21) 来や来やと待つ夕暮と今はとて帰る朝といづれまされり (後撰・五一〇)

- (22) 八百日行く浜の真砂と我が恋といづれまされり沖つ島守 (拾遺・八八九)

- (23) くもる夜の月と我が身の行く末とおぼつかなさはいづれまされり (後拾遺・八七〇、蜻蛉日記・四六)

- (24) たなばたの待ちつるほどの苦しさとあかぬ別れといづれまされり (詞花・九二)

- (25) 色変へぬ松と竹との末の世をいづれ久しと君のみぞ見む (拾

遺・二七五)

「いづれまされり」は(20) (24)のほか五例、「いづれ久し」は(25)のほか二例。

- (26) ●乙女子がとる神垣の榊葉と八年椿はいづれひさしき (能因法師集・一七七)

【いつ】

- (27) 奥山の真木の葉しのぎ降る雪のいつとくべしと見えぬ君かな (後拾遺・六三六)

- (28) みかの原わきて流るる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ (新古今・九九六)

【いづく】

- (29) 世をそむく方はいづくにありぬべし大原山は住みよかりきや (新古今・一六四〇)

- (30) 起きてゆく空も知られぬ明けぐれにいづくの露のかかる袖なり (源氏・若菜下・④二二八)

【など】

- (31) ●たぎつ瀬のなかにも淀はありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき (古今・四九三)

- (32) ●人知れぬ身はいそげども年を経てなど越えがたき相坂の関 (後撰・七三二)

- (33) ●たまほこの遠道もこそ人は行けなど時の間も見ねば恋しき (拾遺・七三七)

- (34) ●あさましやなどかき絶ゆる藻塩草こそは海人のすさびなりとも (金葉・三七二)

- (35) ●聞く人のなどやすからぬ鹿の音はわがつまをこそ恋ひてなく

らめ(詞花・一二四)

- (36) ●夏草は茂りにけれどほととぎすなどわが宿に一声もせぬ(新古今・一八九)

- (37) ●時雨降る音はすれども呉竹のなとよともに色も変らぬ(新古今・五七六)

- (38) ●夏草の露分け衣着もせぬになどわが袖のかわく時なき(新古今・一三七五)

- (39) ●八重ながら色も変らぬ山吹のなと九重に咲かずなりにし(新古今・一四八〇)

- (40) ●かりごろも心のうちにほさなくなと乱れては物思ひをする(貫之集・六六二)

【いかなり】

- (41) ながらへてあらぬまでもことの葉の深きはいかにあはれなりけり(後撰・六〇〇)

【いく―】

- (42) 夏の夜の月まつほどの手すさみに岩もる清水いくむすびしつ(金葉・一五四)

- (43) 淡路島かよふ千鳥のなく声にいく夜ねざめぬ須磨の関守(金葉・二七〇)

- (44) 住吉の松のしづ枝を昔よりいくしほそめつ沖つ白波(金葉・三奏本・五三一)

- (45) 宿りする岩屋の床の苔むしろいく世になりぬ眠こそ寝られね(千載・一一〇九)

- (46) いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみ吉野の花(新古今・一〇〇)

- (47) 七夕のと渡る舟の梶の葉にいく秋書きつ露の玉章(新古今・三二〇)

- (48) 衣打つ音は枕に菅原や伏見の夢をいく夜残しつ(新古今・四七六)

- (49) 年へたる宇治の橋守言問はむいく代になりぬ水の水上(新古今・七四三)

- (50) 都をば秋とともにぞ立ちそめし淀の川霧いくよ隔てつ(新古今・八七六)

- (51) 天にます豊岡姫に言問はむいく夜になりぬ象潟の神(能因法師集・一一四)

- (52) いかばかり秋はかなしき物なれば小倉の山のしかなきぬべし(和泉式部集・三六三)

(31) (40) にみるように、平安時代になると、上代には存しなかつた「など―連体形」の形式が現れる。「など」は「なにと」の転と考えられ、係助詞を含んだ語ではないが、恐らく同意の「なぞ」との類推で連体形で結ぶ形式が成立したのである。「なぞ」は「何ぞ」の転と考えられ、内部に係助詞「ぞ」を含むので、(11) (14) のように、文末は連体形で結ぶ。この、「など―連体形」の形式の成立によって、国語に、単独で文末に連体形を要求する「係の副詞」としての疑問詞が登場することになった。しかし、中古和歌では、(19) (26) のような例が存するものの、なお、「など」を除く単独の疑問詞疑問文は終止形で結んでおり、上代語の状況が継続されている。中古和歌における「疑問詞―終止形」形式は、上代語の語法を継承したものといえるだろう。以上、次のことが確認される。

Ⅱ 平安時代になって、「など―連体形」の形式が現れ、単独で文末

に連体形を要求する「係の副詞」としての疑問詞が国語に登場した。

Ⅲ 中古和歌の「疑問詞―終止形」の形式は、上代語を継承したものと考えられる。

三 中古散文の場合

中古散文資料12種<sup>19)</sup>における該当例は次のようである。

連体形	終止形	誰	何	いづれ	いつ	いづく	など	いかなり	いく
1									
2	1			1				1	
						4			
							56		
								6	1
									2

例をあげる。

【誰】

(53) ● 「誰と聞こえし」などのたまふ。(うつほ・俊蔭・二三)

【何】

(54) 何おほす。いま金すこしにこそあなれ。(竹取・一九オ)

(55) ● 何をもちてとかく申すべき。(竹取・一一オ)

(56) ● 何ならば、かくし給はんとする。(うつほ・国譲上・七〇四)

(54) は「何思す」と解する可能性もあり、そうすれば終止形の確例ではなくなる。

【いづれ】

(57) 年の内出で来る節会の中に、いづれ、いと切に労あり。定め申

されよや。(うつほ・内待のかみ・四一三)

【いづく】

(58) ● 「いづくにかやうにてあひつる」と問はせ給へば(うつほ・国譲下・八三五)

(59) ● 「いづくより参り来べき」と聞こえ給へば(うつほ・楼上・九一五)

(60) ● 「いづこよりこし。きてう(＝「きてう」ハ未詳)よりや。」(うつほ・菊の宴・三四九)

(61) ● 「いづこより入り来つる」と問ふなりつるは(紫式部日記・二九四)

【など】

(62) ● 「などいらへもせぬ」と言へば(伊勢・一四五)  
「など／＼などて―連体形」は(62)のほか、55例。

【いかなり】

(63) かかればこそは、人なくて(＝人ヲ使ワズニ)年ごろ経つれ。

「人ヲ使エバ」いかなる費えあり。(うつほ・藤原の君・八九)

(64) ● 「いかにいかに懲じ給ひし」と問へば(落窪・一八二)

(65) ● 老いたると見しおとどの、いかに幼き子をも給へりける。(落窪・二四二)

(66) ● までや、こはいかに仰せらるる。(源氏・玉鬘・③九八)

(67) ● 「いかなれば、かうなきかと尋ねばかりまでは見えざりつる」と仰せらるるに(枕草子・二四九)

(68) ● いといとほしうていかなりしなども問ひ聞こえ給はず(源氏・夕霧・④四三三)

(69) ● かく思しかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推しはかり給はむ。(源氏・総角・⑤二六六)

なお、(63) は疑問文ではないとする考え方もあり得よう。

【いくー】

- (70) ●弟宮は、いくらほど大きにおはする。(うつほ・蔵開中・五九四)

(71) ●四の君はいくら大きさに成り給ひぬる。(落窪・八五)

右にみるように、中古散文にあつては、(54) (57) (63) などの若干の例外―それも(54) (63) は別の解釈があり、残った(57) も『うつほ物語』という本文上に不安の残る用例である―を除いて、単独の疑問詞はすべて述語に連体形を要求すると捉えることができる。

ここで問題になるのは、(72) (76) のような句型である。これらは形式上、「疑問詞―終止形」の形をとっているが、いずれも疑問文ではないと考えられる。例えば(72) は、「夕顔がどうおなりになったと人に言いましよう」の意であつて、「いかになり給ひにき(＝ドウオナリニナッタノデスカ)」という疑問文ではない。

- (72) いかになり給ひにきと人にも言ひ侍らん。(源氏・夕顔・①一七九)

(73) ここにはいかに思ひ聞こえたりとか見る。(蜻蛉日記・五六)

- (74) ここ(＝私)にはまたいくばく立ち後れ奉るべしとてか、その

(＝女三宮ノ)御後見のことをば受け取り聞こえむ。(源氏・若菜上・④三九)

(75) よばふ男二人なむありける。…暮るればもろともに来あひぬ。

物をおこすれば、ただ同じやうにおこす。いづれまされりといふべくもあらず。(大和・三二二)

(76) いくそばく、いくちとせ経たりと知らず。(土佐・一一)

疑問詞が疑問ではなく不定を表す場合、(77) (81) のように、文末は必ず通常の終止の形(係助詞に対する曲調終止や命令形を含む)で結

ぶ。<sup>22</sup> (72) (76) もこれと同様の型であると考えられる。

(77) 何のしるしあるべくもあらず。(竹取・三才)

(78) 何事にもあらず。(平中・二二)

(79) 何事もおぼつかならずのたまへ。(落窪・二二〇)

(80) 月影は、いかなる所にもあはれなり。(枕草子・二八七)

(81) 誰も知りがたし。(源氏・絵合・②三八〇)

以上に見るように、中古散文にあつては、係助詞を伴わない疑問詞疑問文は、一般に連体形で結ぶと捉えられる。したがつて、萩原広道の主張は、上代にあつては正しいが、中古散文にあつては不当であると評される。

疑問詞が係助詞を伴わなくても連体形で結ぶようになったのは、通常の疑問文の文末が連体形で結ぶことからの類推によるものと思ふが、上代の状況にみるように、国語の疑問詞は、係助詞を伴わない場合、本来終止形で結ばれたのであつて、かかる語法の残存が和歌、また時に散文にもみられるのだと思われる。

以上、中古散文にあつては、――稀に「疑問詞―終止形」の句型の疑問詞疑問文もみられるもの――「疑問詞―連体形」の句型が基本であると捉えられるので、

(82) 誰ならむ。(源氏・若紫・二五七)

(83) 若君はいづくにおはしますならむ。(源氏・空蟬・一一三)

(84) 香炉峰の雪いかならむ。(枕草子・二六八)

のような例における文末の「む」は連体形と考えるのがよい、ということになる。

以上、次のことが確認される。

IV 中古散文にあつては、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文は連

体形で結ぶのを基本とする。<sup>(2)</sup>

#### 四 結論

本稿では、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文の結び（文末形式）について、次の諸点を述べた。

- I 上代歌謡・『万葉集』では、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文は、すべて終止形で結び、例外がない。
- II 平安時代になって、「など―連体形」の形式が現れ、単独で文末に連体形を要求する「係の副詞」としての疑問詞が国語に登場した。
- III 中古和歌の「疑問詞―終止形」の形式は、上代語を継承したものと考えられる。
- IV 中古散文にあつては、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文は連体形で結ぶのを基本とする。

#### 注

- (1) 使用テキストは注(8)(12)(19)参照。所在は、散文は使用テキストのページ数、和歌は使用テキストの歌番号で示す。出典の名称は「物語」「和歌集」などを省略する。引用にあたり、表記は私に改めた。なお、以下では、「大系」(日本古典文学大系)、「新大系」(新日本古典文学大系)、「新全集」(新編日本古典文学全集)の略称を用いる。
- (2) 小柳智一(二〇〇二)が説くように、現代理解されている「係結」の範囲は、広道の「係結」を基礎とし、宣長の「本末」を直接の基礎としているわけではない。

(3) 小川栄一(一九八七)は、文末が確定の表現のときには連体形、判定・未定の表現のときには終止形で結ぶと主張する。

(4) 用例数を示しての調査報告としては、三宅尚子(一九八五)の上代歌謡および『万葉集』の調査、高瀬正一(一九八九)の『源氏物語』の調査があるが、通時的に用例数を示したものはないようであるし、三宅尚子(一九八五)、高瀬正一(一九八九)の処理にも問題があると思う。例えば、三宅尚子(一九八五)は、

「 ―終止形」で人に問う形があつたとするよりも、「 ―連体形。」で人に問う形があつたとする方が自然である。

として、「汝はいかに思ふ」(万葉集・三三〇九)の「思ふ」を連体形として数えているし(これではこの問題の調査にならない)、高瀬正一(一九八九)は「いかに多かる涙なりけり」(古今和歌六帖)を引き歌とする、  
・「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに(幻)

を「疑問詞―連体形」の例として数えている。また、高瀬正一(一九八九)が「疑問詞―終止形」の「確例」としてあげる、  
・いかになり給ひにきとか人にも言ひ侍らん。(夕顔)

は、本稿第三節で述べるように、疑問文ではない。

(5) 例えば、次のような例。  
・誰なりと(誰デアツテモ) おくれ先立つほどあらば形見にしのべ水茎の跡  
(新古今・一九八七・切出歌)

・津の国のなには思はず(他二何モ願ワナイ) 山城のとはにあひ見んことをのみこそ(古今・六九六)

・背けども天の下をし離れねはいづくにも降る涙なりけり(新古今・一七四四)

(6) 例えば、次のような例を除く。  
・大夫はいづくに行きたりつるぞ。(蜻蛉日記・一八三三)

・何になり給へるぞ。(枕草子・七六)

・ふるさとのならしの岡にほととぎす事伝てやりきいかに告げきや(拾遺・一〇七七)

(7) 注4にあげた「いかに多かる」(源氏・幻・④五四二)や、「何にかかれる」(源氏・宿木・⑤三九五)の類。

(8) 上代歌謡は『日本古典文学大系3古代歌謡集』(岩波書店刊)、『万葉集』は『万



葉集CD-ROM版」(塙書房刊)による。

- (9) 以下、表の「いづく」には「いづく、いづち、」などには「などて」、「いかなり」には「いかに」、「いく」には「いかばかり」を含む。
- (10) 上代歌謡には例を得なかった(例えば「いづくに至る」(古事記歌謡・四二)は「至る」が終止形・連体形同形なので採れない)。
- (11) 逆に言えば、疑問詞疑問文は、疑問の係助詞を伴うか、文末に推量の助動詞「む」「らむ」「けむ」「まし」「じ」・終助詞「ぞ」を伴うか、あるいはその両方であるのが、常態なのである。
- (12) 八代集は、古今・千載は岩波文庫、後撰・拾遺・後拾遺・金葉(二度本)・詞花は新大系、新古今は角川文庫による(用例の検索には「八代集総索引」(大学堂書店刊)を用いた)。私家集は、次の索引・テキストから採集した。
- 『紀貫之全歌集総索引』(大学堂書店刊)、『私家集 小町・業平・遍昭・友則・能因・範永 総索引』(大学堂書店刊)、『伊勢集 斎宮集 語彙索引』(笠間書院刊)、『紫式部日記語彙用例総索引 付録紫式部集索引』(勉誠社刊)、『和泉式部集・和泉式部集統集』(岩波文庫)
- 散文資料中の和歌とは、注(19)にあげた資料中の和歌の例である。
- (13) 遍昭集の「まだき宿にもいくかはふる」(二四)は、新編国歌大観「またきやどにもいくかはふる」により採らない。
- (14) 以下、用例上の「●」印は、疑問の係助詞を伴わない疑問詞疑問文が連体形で結ばれている用例を示す。
- (15) 上に助詞「や」を含む場合を除く。上に助詞「や」がある場合は、八代集で、①のように終止形で結んだ例が五例(①のほか、後撰七一、後拾遺六三七、同六五二、詞花三七五)、②のように連体形で結んだ例が三例(②のほか、拾遺一一五七、千載六七四)存する。
- ① 涙河流す寢覚もある物を払ふばかりの露や何なり(後撰・七七二)
- ② 唐衣竜より落つる水ならで我が袖濡らす物や何なる(拾遺・一一八九)
- (16) この事実、すでに三宅尚子(一九八五)に指摘がある。
- (17) 三浦和雄(一九七四)第四章。
- (18) 船城俊太郎(一九七三)は、「疑問詞終止形」の形式は、上代でも和歌だけに用いられる特別な表現であったとする。船城も言うように、用例が乏しすぎて明確な判断が下せないが、船城説では、和歌以外では連体形で終止するもの

が、なぜ和歌だけは終止形で終止する表現が用いられたのか、説明に窮することになる。ミ語法や、「植ゑおきし我や見べき花すすき」(和泉式部集・七四八)のように、和歌に古い時代の語法が残存することは多いのであり、この形式も古い時代の語法の残存とみた方が穏やかであろう。なお、この表現形式は後世まで継承されてゆく。

・明かしかね窓暗き夜の雨の音に寢覚めの心いくしほれしづ(玉葉和歌集・二一七一・永福門院)

(19) 使用テキストおよび用例の検索に用いた索引は次の通りである。

『竹取物語総索引』(武蔵野書院刊)、『土左日記総索引』(日本大学人文科学研究所刊)、『伊勢物語』(大系)、『伊勢物語総索引』(明治書院刊)、『大和物語』(大系)、『大和物語語彙索引』(笠間書院刊)、『附載説話を除く』、『平中物語』(研究と索引)、『淡水社刊]、『落窪物語』(大系)、『落窪物語総索引』(明治書院刊)、『うつほ物語の総合研究』(勉誠出版刊)、『かげろふ日記総索引』(風間書院刊)、『枕草子総索引』(石文書院刊)、『源氏物語』(新全集)、『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』(角川書店刊)、『紫式部日記』(新大系)、『紫式部日記語彙用例総索引』(勉誠社刊)、『和泉式部日記総索引』(武蔵野書院刊)

(20) 用例(57)について、新全集も、室城秀之『うつほ物語全』(おうふう刊)も、「旁ある」に本文を校訂している。

(21) なお、補文に疑問詞をもつとき、補文が独立した一文として取り出せなくなる現象は種々にみられる。例えば、

① 「どこへ行け」というのか。

② 「誰見よ」と花咲けるらむ(古今・八五六)

では、補文は、「どこへ行け」「誰見よ」という命令文として取り出せない(中村幸弘(一九九七)参照)。

③ 「名古屋へ行つた」ことがない。

④ 「ヨーロッパは」どこへも行った」ことがない。

では、③は補文「名古屋へ行つた」が一文として成立するが、④では「どこへも行った」という独立した文が「こと」を修飾しているとは捉えられない(③

④は、岐阜聖徳学園大学外国語学部、吉村敬子氏からの教示(直話)による)。

(72) ~ (76) は疑問文とはいえないが、このような句型に、もともと疑問詞の結びが終止形であった古い語法が残ったとも解釈されるだろう。上代の例(9)

は、(72) ～ (76) と同じものとも捉えられる。  
 (22) なお、次のような例に注意されるが、これは連体形終止の文になっていないと解される。

・なに事すとも見えでうしろざまに行く、いかなるにかあらむ。(枕草子・二四(参照「なにわざすともなきやうなれど」枕草子・六一))

(23) なお、(57) のような、「疑問詞―終止形」の句型は、後世にもごくまれにみられることにも注意される(左例②は反語の例である)。

①「さても、こののしる無量寿院には、いく度参りて拝み奉り給ひつ」と「世次が繁樹二」言へば、「繁樹八」おのれは、……、試案といふこと、三日かねてせしめ給ひしになむ参りて侍りし」と言へば、世次、「おのれは、度々参り侍り。…」(大鏡・新全集・三五六)

②「唐の後の死なむ「コトハ」、日本になに苦し(「反語」とただ一言いはれたりければ(十訓抄・新全集・六二))

(24) このIVは、通説と結果として変わらないけれども、通説は、船城俊太郎(一九七三)が指摘するように、萩原広道説を検討し、それを否定した上で説かれているのではなく、単に、萩原広道説の存在を知らず、本居宣長『詞玉緒』にそのまま従っている面が多分にあるように思われる。

引用文献

小川栄一(一九八七)「疑問文が連体形に終止することの意義」『福井大学教育学部紀要 第一部人文科学(国語学・国文学・中国学編)』36  
 小杉商一(一九八六)「いく夜寝ざめぬ」の場合」『東京外国語大学論集』36  
 此島正年(一九七二)「露や何なり」『国学院雑誌』73―11  
 小柳智一(二〇〇一)「係結についての覚書―学史風―」『学芸国語国文学』33  
 高瀬正一(一九八九)「疑問詞による係り結びについて」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』  
 徳原茂美(一九九一)「いく夜ねざめぬ須磨の関守」『武庫川国文』38  
 中村幸弘(一九九七)「不定語に続く命令形について(上)(下)」『国学院雑誌』98―8、9

船城俊太郎(一九七三)「疑問詞疑問文は連体形で終止する」『言語と文芸』76  
 三浦和雄(一九七四)『文語文法 用例と論考』明治書院  
 三宅尚子(一九八五)「不定語を含む疑問表現の類型」『国文学研究ノート』18  
 山田孝雄(一九〇八)『日本文法論』宝文館出版